

生活道路における小学生と保護者の 安全意識の違いに関する研究

橋本 成仁¹・片山 紗緒里²・吉城 秀治³

¹正会員 岡山大学大学院准教授 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山市北区津島三丁目1-1)
E-mail:seiji@okayama-u.ac.jp

²学生会員 岡山大学大学院 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山市北区津島三丁目1-1)
E-mail:katayama1s@s.okayama-u.ac.jp

³学生会員 岡山大学大学院 環境学研究科 (〒700-8530 岡山市北区津島三丁目1-1)
E-mail:gev421121@s.okayama-u.ac.jp

生活道路や地域全体の安全の向上を考える上で、子供の安全の確保は重要であり、そのためには子供が危険だと感じる箇所の把握が必要である。本研究では、生活道路における子供と大人の交通安全への意識の違いを明らかにするために、小学4・5年生とその保護者に対し、交通安全に関するアンケート調査を実施した。その結果、小学生・保護者ともに自動車の交通量が多いことに対して危険を感じていることが分かった。さらに、小学生は自動車に関して、交通量よりも走行速度による影響度が高く、保護者は交差点が多いことが危険の判断に影響することが明らかとなった。

Key Words : traffic safety, elementary student, parent, questionnaire survey

1. はじめに

交通事故による死者数は年々減少しているものの、交通事故の発生地点別の死傷事故件数をみると生活道路の減少幅は他と比べて少なく、生活道路への事故防止の対策の必要があると考えられる。対策としては、従来からハンプや狭さく、歩道や交差点のカラー化などが導入され、生活道路を抜け道としての利用や走行速度が速い自動車への対策が進められている。これらに関連する研究としては、生活道路の抜け道としての利用を抑制するための対策とその効果の検証を行った研究¹⁾などをはじめとして数多く行われている。

一方で、子供が関係する交通事故による死者数も減少傾向にある。しかしながら、子供が交通事故に巻き込まれることも決して少なくなく、依然として子供が安全に歩行できる道路空間は十分に確保されていない。また、子供の多くは自宅に近い場所で事故に遭うことが多く、子供の身近な道路空間である生活道路や地域における安全の確保が重要視されている。また、人々の生活に身近な生活道路や地域全体の安全の向上を考える上で、子供の安全の確保について配慮することは重要だと考えられ、子供の安全確保を考える際には、子供が危険だと感じる箇所の把握が必要になる。子供が危険だと感じる場

所を把握する方法としては、ヒヤリハットマップや安全・安心マップの作成が近年盛んに行われている。学術的な視点からも検討が進められており、高齢者と若年者の自転車に関するヒヤリハット事象について分析した研究²⁾や、小学生の通学路におけるヒヤリハットの指摘箇所と事故発生地点の関連性を分析した研究³⁾などがなされている。また、客観的なデータから通学路上の危険箇所の抽出を試みた研究⁴⁾や、アンケート調査に基づいた子供の視点での通学路環境に対する意識を把握した研究⁵⁾なども行われており、子供の視点に立った危険箇所の抽出が行われている。他にも、子供に対する交通安全教育のアプローチの仕方による意識変化や行動変化に与える影響を明らかにした研究⁶⁾や、交通安全教育における学校と児童・生徒の認識の差を把握した研究⁷⁾や、児童に対する交通・環境教育が保護者に与える影響を明らかにした研究⁸⁾など、交通安全教育が子供やその保護者に与える影響の分析についても研究がなされている。しかしながら、子供と大人の交通安全への意識の違いを明らかにしたものはいまだに見られない。そこで本研究では、身近な道路空間である生活道路における子供と大人の交通安全への意識の違いを明らかにするために、松山市立久米小学校の4・5年生とその保護者を対象にした交通安全に関するアンケート調査を実施した。

2. 研究概要

道路における安全の意識について、子供と大人の意識の違いを把握するために、松山市立久米小学校の4・5年生261人（4年生125人、5年生136人）とその保護者261人に対し、平成25年7月中旬にアンケート調査を実施した。調査の概要を表-1に示す。得られた回答票数は、小学生が256票、保護者が232票で、回収率はそれぞれ98.1%、88.9%であった。主な調査項目としては、小学生・保護者ともに久米小学校区内に存在する様々なタイプの道路を抽出し、それらの道路について「通行頻度」「道路を走行する自動車の速度や交通量に対する意識」「子供たちがじゃれあいながら歩いても安全か否か」について尋ねている。子供たちが友達とはしゃぎながら歩いても安全か否かの質問に対し、「どちらともいえない」「やや危険」「危険」と回答した人については理由も併せて調査した。

3. 道路に対する小学生と保護者の意識の違い

本章では、アンケート調査で尋ねた小学校区内の道路の中でも、住民の通行頻度が高く、交通事故が発生して

表-1 アンケート調査概要

調査名	小学生とその保護者に対する安全に関するアンケート調査
調査対象者	松山市立久米小学校の4・5年生（261人）とその保護者（261人）
調査時期	平成25年7月中旬
調査方法	自記式アンケート
配布数	522部（小学生261部、保護者261部）
回収数	488部（小学生256部、保護者232部）
回収率	93.5%（小学生98.1%、保護者88.9%）
主な調査項目	道路における ①通行頻度 ②自動車の走行速度 ③自動車の交通量 ④小学生が友達とじゃれあいながら歩いても安全か否か



図-1 調査で尋ねた道路の様子

いる道路についての安全意識について分析した。その結果から、小学生と保護者との安全への意識の違いについて見ていく。

(1) 通行頻度

回答者がこの道路を通行する頻度を図-2に示す。小学生の約5割が「よく通る」「ときどき通る」と回答、保護者の約6割が「よく通る」「ときどき通る」と回答しており、この道路における通行頻度は高かった。

(2) 自動車の走行速度

この道路の通行頻度について「よく通る」「ときどき通る」「あまり通らない」と回答した人について、この道路を走行する自動車の走行速度に対する意識について抽出した。その結果を図-3に示す。小学生の約6割が「速い」「やや速い」と感じており、保護者の約8割が「速い」「やや速い」と感じている。独立性の検定を行った結果、有意水準1%で統計的な差がみられ、この道路における自動車の走行速度について、保護者は小学生に比べ、やや速いとの回答割合が高い。

(3) 自動車の交通量

この道路の通行頻度について「よく通る」「ときどき

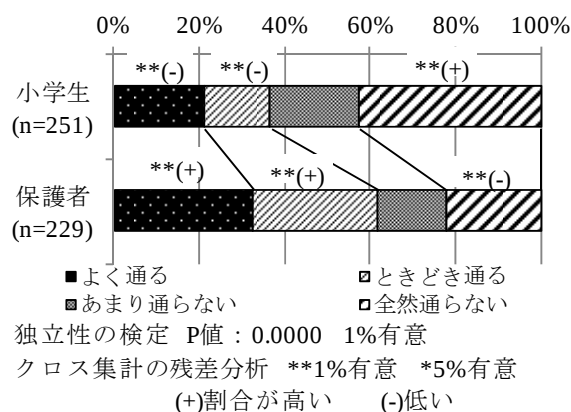


図-2 道路の通行頻度

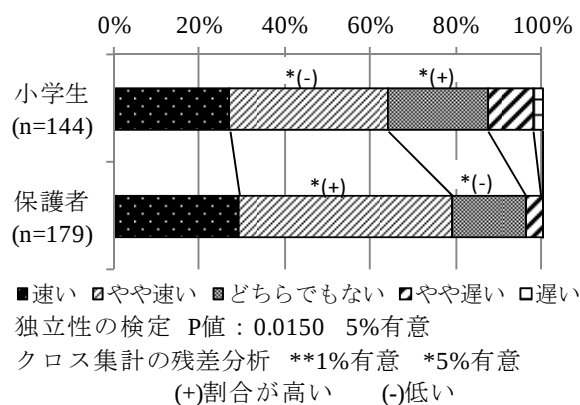


図-3 自動車の速度に対する意識

通る」「あまり通らない」と回答した人について、この道路を走行する自動車の交通量に対する意識について抽出した。その結果を図-4に示す。自動車の交通量について、小学生の約5割が「多い」「やや多い」と感じており、保護者の約8割が「多い」「やや多い」と感じている。独立性の検定を行った結果、有意水準1%で統計的な差がみられ、この道路における自動車の交通量について、保護者は多いと感じる割合が小学生に比べて多い。

(4) 道路の安全の評価

この道路の通行頻度について「よく通る」「ときどき通る」「あまり通らない」と回答した人について、この道路において小学生が友達とじゃれあいながら歩いても安全か否かについて抽出した。その結果を図-5に示す。小学生の約8割が「危険」と感じており、保護者の9割強の人が「危険」と感じている。独立性の検定を行った結果、有意水準が1%で統計的な差がみられ、保護者の方が小学生に比べて危険を感じる傾向にある。

また、小学生が友達とじゃれあいながら歩くことに対して「どちらでもない」「やや危険」「危険」と答えて

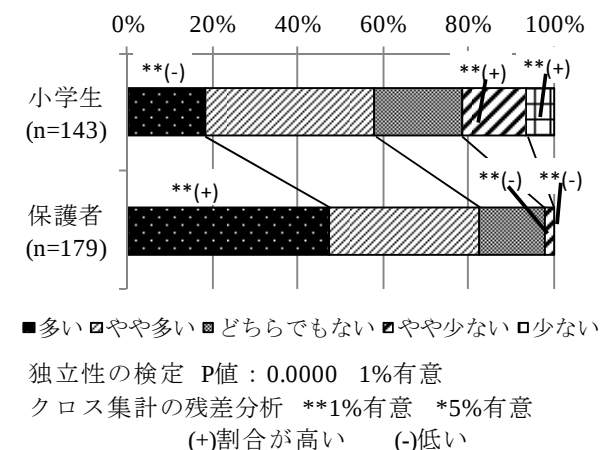


図-4 自動車の交通量に対する意識

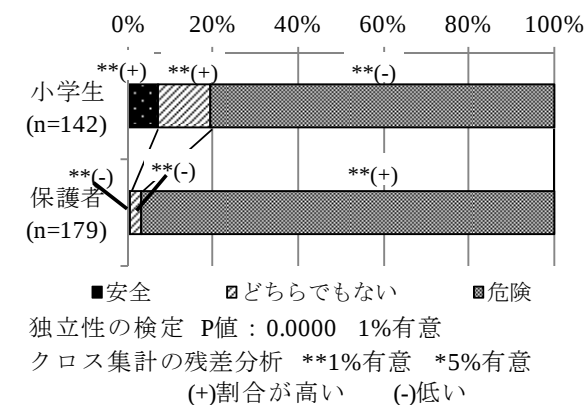


図-5 道路の安全の評価

た回答者に、なぜ危険だと感じるのか理由を尋ねた。危険だと感じる理由についての選択率を図-6に示す。小学生の理由として、「自動車が多い」が一番多く、次いで「路側帯が狭い」、「脇道からの人や自転車、自動車の飛び出し」という結果になった。保護者の理由としては、「自動車が多い」ことが一番多く、次いで「脇道からの人や自転車、自動車の飛び出し」、「歩道がない」という結果になった。各項目において独立性の検定を行った結果、「歩道がない」「道路が狭い」「交差点で自転車や自動車が出てくるのが分からない」「自動車が多い」「自動車の走行速度が速い」「脇道からの人や自転車、自動車の飛び出し」の6項目については、有意水準1%で統計的な差がみられ、保護者の方が危険な理由の要因と感じている傾向がある。

(5) 安全の評価に影響を与える要因の把握

道路の安全の評価において「どちらでもない」「やや危険」「危険」と回答した人について、危険だと感じる理由に着目し危険だと感じる度合いに影響を及ぼす要因を探るために、危険だと感じる度合いを目的変数、危

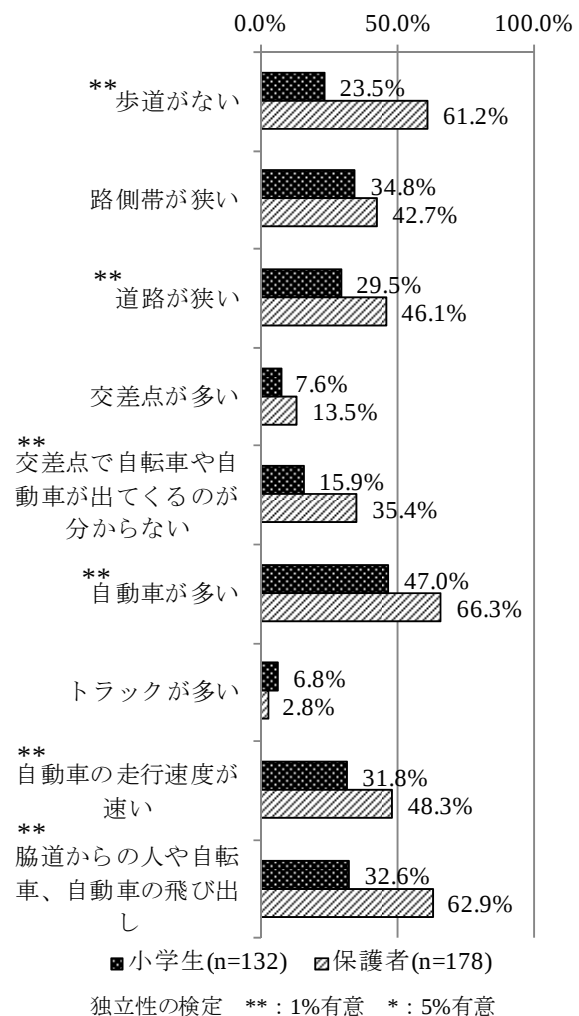


図-6 危険だと感じる理由 (複数選択)

険だと感じる理由を説明変数として数量化Ⅱ類を用いて分析を行った。小学生について分析した結果を図-7、保護者について分析した結果を図-8に示す。なお、多重共線性が見られた項目については除外して分析を行った。

分析の結果、小学生については、「自動車の走行速度が速い」ことや「路側帯が狭い」こと、「自動車がが多いこと」が危険だと感じることに影響が大きい傾向にある。保護者については、「交差点が多い」こと、「自動車の走行速度が速い」ことが危険だと感じることに影響が大きい傾向にある。

4. おわりに

本研究では、小学生とその保護者を対象として、子供と大人の生活道路における交通安全への意識の違いを明らかにした。その結果、小学生に比べて保護者の方が道路に対して危険を感じている傾向にあることが明らかとなった。また、危険な道路だと感じる要因について、小学生・保護者ともに自動車の交通量が多いことに対して危険を感じていることが分かった。さらに、小学生は自動車に関して、交通量よりも走行速度による影響度が高く、保護者は交差点が多いことが危険な道路の判断に影響を受けることが分かった。今回のアンケート調査では、親子のペアリングをして回収を行った。今後の研究では、ペアリングの分析による親子間の交通安全に対する意識の違いなどを明らかにしたい。

謝辞：本研究を進めるにあたり、公益財団法人タカタ財団の研究助成を頂きました。また、今回のアンケート調査に関して松山市立久米小学校の先生方、児童や保護者の皆様、久米公民館の方々には多大なるご協力を頂きました。この場を借り、厚く御礼申し上げます。

参考文献

1) 小嶋文，久保田尚：抜け道利用ドライバーに対する自覚促し実験の効果に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.25，No.4，pp.869-879，2008

2) 草野優太，亀谷友紀，山中英生：高齢者・高校生の自転車による交差点ヒヤリハットの比較分析，土木学会論文集 D3，Vol.67，No.5，pp.1251-1257，2011

3) 増岡義弘，橋本成仁，三村泰広：ヒヤリハットマップの作成と指摘箇所，事故発生地点の関連性の考察，交通工学研究発表会論文報告集，Vol.27，pp.301-304

4) 藤本尚子，藤田素弘：子供の視点に基づく通学環境の評価に関する研究，都市計画論文集，No.43-3，pp.415-420，2008

5) 小西圭介，石橋知也，柴田久：通学路図にみる児童の安全な通学環境に関する考察-福岡市立全小学校を対象として-，都市計画論文集，No.43-3，421-426，2008

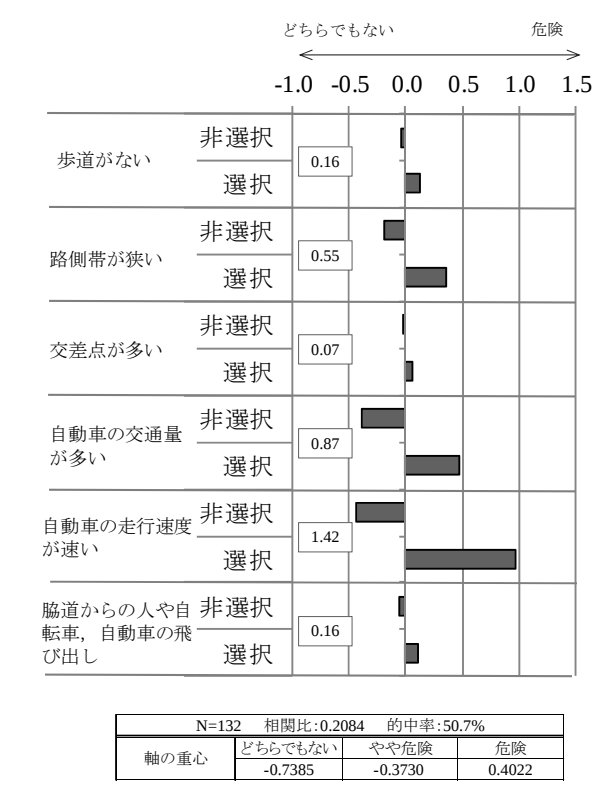


図-7 小学生の危険だと感じる要因

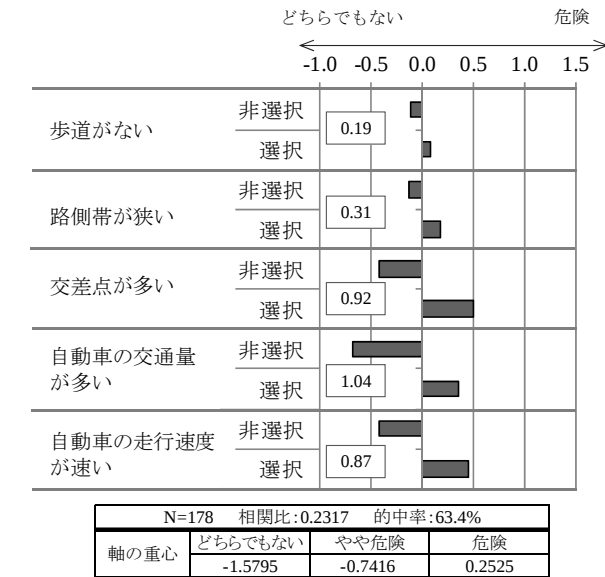


図-8 保護者の危険だと感じる要因

6) 中村敦，大森宣暁，原田昇：小学生を対象とした自動車交通安全教育とその効果に関する研究，都市計画論文集，No.41-3，pp.583-588，2006

7) 小竹雄介，日野泰雄，吉田長裕：児童生徒の自転車利用意識と交通安全教育の課題に関する調査研究，土木学会論文集 D3，Vol.68，No.5，pp.1185-1191，2012

8) 谷口綾子，今井唯，石田東生：児童を対象とした交通・環境教育がその保護者に与える影響に関する研究，都市計画論文集，No.44-3，127-132，2009

(???.? 受付)